

故八木三男所長の 蔵書を整理して

大滝浩道

この夏、当研究所の所長をされ五年前に亡くなられた八木三男先生の蔵書を整理した。

奥様は残された膨大な蔵書を広く市民の方に利用してもらえないかとも考えておられました。そのために蔵書の整理を依頼されていましたが、私の怠惰でそのままになっていました。ところが今回は待ったなしの状況になりました。

その理由は本誌に連載の「町医者日記から」の執筆者の瀬賀

弘行さんが私設の図書館を開館して、八木先生など三人の蔵書をそこに収蔵展示することになったからです。

八木先生が村上高校の日本史の教員をしていた頃、同じ学校で英語の教員をしていた故大嶋久夫先生の蔵書も引き継ぐことになった。

「大町文庫」と名づけられた瀬賀さんの私設図書館は、村上の古い町並みの中心、大町に旧町家風の二階建てで建設された。この話はすでに新聞やテレビで報道されたとおりである。お二人

とも医師である瀬賀さんに人生の最後を看取ってもらった縁にもよるが、瀬賀さんは主を失った蔵書の散逸を惜しむとともに、尊敬する八木先生や大嶋先生がどのような読書を経てその知識や知性を形成して行ったかを多くの人に知ってもらいたいという趣旨で、蔵書を丸ごと引き取り公開することにした。

八木先生の書庫はその書齋に隣接して六畳ほどの広さで、天井まで書架が作り付けてある。

奥様によると書庫の蔵書の冊数は数えたこともなく、おそらく本人も一度も数えたことがないと思うと話しておられた。

私は生前長く先生と接していたが、書庫には一回より入ったことがない。

書庫を人に開放することはいわばその人の心の内部を覗かれるだけでなく、その人の知的水準を人前に曝すに等しい。

そのことを奥様は自分の体の内部を曝け出すようで生前の本人なら嫌だったと思うと話しておられた。

二

書庫の書物をすべて大町文庫に移したわけではない。あまり古く痛んだ本は除外をした。雑誌の類も除外した。また大町文庫の収容能力もあり、『新潟日報』などで報じられたように五千冊には遠く及ばず、その半分の約二五〇冊程度になった。それでも大町文庫の書棚の三分の一以上を占めることになった。

作業は八月のお盆過ぎから一週間程度かかった。私がこれと思う書物を書棚から抜き出し、奥様とお友だちの方が全集は番号順に並べて埃を払った。

九月から十月にかけて大町文庫を建てた業者の方のご協力で大町文庫に運びこまれた。

その後は奥様とお友だちが書物一冊一冊に「八木蔵書」印を押印した。またいまはボランティアの方が蔵書の記録作業を進めている。

私が八木先生の書庫を一瞥して感じたことは書物の数が想像していたより少ないと言うことであつた。それはおそらく雑誌の数が多しと言うことから来ているのかもしれない。そして入り口に近い書棚の書物は亡くなる直前まで使われたと思われる書物が多く見受けられた。

晩年は体が不自由なために入り口の書棚や書斎のなかの書棚を使っていたと思われます。

八木先生は高校で主に日本史の教員をしていたことから、当然ながら歴史関係の書物が一番多くを占めていた。

「国史大系」「古事類苑」「越佐史料」「大日本古文书（上杉家）」等々である。

また「日本思想体系」「日本近代思想体系」「現代史史料」「日本古典文学大系」等の基本図書のほかにも全集では「本居宣長全集」「柳田國男全集」「荻生徂徠全集」「齋藤茂吉全集」「太宰治全集」「中野重治全集」「ヘーゲル全集」「編年百姓一揆史料集成」「宇垣一成日記」「イエズス会日本報告集」「講座精神の科学」「講座基本法学」、そして第一回配本からの「東洋文庫」（亡くなられて中断）など、幅広い読書の傾向が跡付けられます。

三

これらの書物の殆どは、その発行年代等から先生が五十代の前半で教員を退職するころまでに購入され利用されていたようです。

退職後は当研究所の業務に専念するため教育学を勉強する目的で東大の大学院に聴講生とし

て通学しました。そのことにかかわって書物の傾向が一変しています。つまりこの前後からもっぱら教育関係の書物が増加し始めています。

教育関係の書物は、大町文庫に搬入した書物を数えただけでも二百冊を超えます。

そして何よりもこれらの教育関係の書物には行間に傍線が引かれ、書物によつては10本以上の付箋が差し込んであります。

書齋での日頃の読書の様子を垣間見る思いでした。残念でしたがすべて付箋は引き抜きました。

また雑誌類は殆どが教育にかかわる雑誌で、現実の教育の動きを幅広くフォローしていた有様が偲ばれました。

その教育関係の書物も近代の西洋政治思想関係の書物が多く見られました。これはご自身の

教育論を従来の教育技術書や教育概論的な書物に頼るのではなく、近代政治思想等で裏づけようとしたのではないかと思われるます。

ですから蔵書からは教員の現役時代と、当研究所が発足してからの教育問題の研究にかかわる書物に二分されていると感じました。

四

理由は分かりませんがいくつかの全集には多くの欠本が見られました。また先生はイチロー選手の大ファンでしたからイチロー関係の本も二、三冊見受けられました。そのなかには打率などをメモした用紙が挟まれています。

大町文庫の搬入展示では、八木先生の幅広い読書からどのようにしてその知性を創り上げられたかを示すような展示にした

いと思われました。

元東大教授の牧征名先生は、八木先生の幅広い知性を評価して、政策的文章だけでなく文人らしい文章を書き残さなかつたことを惜しんでおられました（追悼集『櫛』より）。

八木先生は亡くなる前にセクシュアリティーとしての女性に注目した文章を書きたいと抱負を語っておられました。蔵書からはそれに関連した書物を見ることは出来ませんでした。

それはまだ先のことだと思つていたのでしようか。

大町文庫はこのあと八木、大嶋両先生のほかにもうお一人の蔵書を加えて、インテリジェンスな発信の広場になることが望まれます。

（おたきこうどう・所員）